

亥改新田(寺ヶ池跡)と松原高校

西田 孝司 (松原市文化財保護審議会)



▲松原高校玄関前の金城氏・卒業生共同の彫刻作品



▲松原高校から北側の「亥改新田」(寺ヶ池跡)方面をのぞむ



◀「河内国丹北郡三宅村絵図」(三宅中4丁目、妻屋宏氏蔵、江戸時代中期)上が南。下(北)の新大和川の南東に寺ヶ池跡の「亥改新田」(丸印)がある。松原高校は新田の南側。

江戸中期、三宅の寺ヶ池が大和川の改流で亥改新田に

去る二月、三宅東三丁目にある大阪府立松原高校を沖繩の「琉球新報」の記者が取材に訪れました。同紙が連載する「高校でも一緒に」欄に同校の人權学習を紹介するためです(二月十九日付)。

松原高校は昭和四十九年(一九七四)、「地元」に府立の全日制普通科高校を」という市民の熱心な声を反映して四万人も署名が集められ、開校しました。今では総合学科に改編され、特色ある選択授業が行われています。その先駆けとして、昭和五十三年に、障がいのある生徒の受け入れを始めたことで、平成十八年の「知的障がい生徒自立支援コース」ができ、高校入学制度が実現したのでした。

校門を入った玄関前に大きな彫刻作品があります。運動会を表現しており、車いすの生徒が中心に描写されています。障がいのある生徒も、ない生徒も「共に学び共に育つ」という同校の象徴として、沖繩・読谷村の彫刻家・金城実さん(81)が昭和五十六年、当時の卒業生と共同制作したものです。金城さんはこの頃、大阪の夜間中学校で障がいのある生徒を教えていたことから、郷里沖繩の人権問題にもおもいをこめ、制作したのでした。

ところで、松原高校の建つ地は三宅の最東端で、校舎の西側には江戸時代前半には十郎ヶ池という丹北郡三宅村

の灌漑池がありました。さらに、八世紀の奈良時代にさかのぼると、周辺では当時の役所の跡か、有力豪族の屋敷と思われる規模の大きな掘立柱建物などの遺構が見つかっています。松原高校を含む土地の小字を「蔵重」とよんでおり、蔵重遺跡として知られています(「歴史ウォーク」208)。

十郎ヶ池の地は、いまでは三宅東公園として整備されています。すでに江戸時代の元禄十二年(一六九七)、十郎ヶ池は土砂の堆積がひどかったので、ため池としての機能はほとんど失われていました。

この十郎ヶ池の北東側に、寺ヶ池というため池がありました。元禄年間(二六八八〜一七〇三)以前に掘られていましたが、宝永元年(一七〇四)、大和川が今のように三宅方面に付け替えられたことから、池は埋めたてられることになりました。

寺ヶ池は三宅に所在していました。三宅の北側の丹北郡東瓜破村(現大阪市平野区)の田畑に水を送るため池でした。ところが、大和川の付け替えによって、東瓜破村の田畑が大和川の新川床となったのです。このため、寺ヶ池のため池としての機能が失われたので、当時の領主であった松平右京大夫が宝永五年(一七〇八)に池を埋めたて新たに田畑をつくる新田開発を命じました。水田六反二畝一七歩、畑一反九畝二十八歩が新しく開墾され

たのです。この時の新田名は「字寺池新開」と名づけられました。

その後、明和七年(一七七〇)から安永二年(一七七三)の間に作成されたと考えられる『河内国丹北郡三宅村絵図』(三宅中四丁目・妻屋宏氏蔵)には、新田名が改められ、南北に細長い「亥改新田」と明示されています。新大和川のすぐ南で、東側は丹北郡別所村に接し、今の阪神高速道路松原線にかかるあたりです。

もともと「字寺池新開」とよばれていた名が「亥改新田」に変わった理由は「三宅村本郷分郷耕地絵図」(江戸時代・年末詳、同氏蔵)に「宝暦五年亥改新田」とあることからわかります。すなわち、寺池新開に宝暦五年(二七五五)、土地の反別・石高・耕作者などを調べる検地が行われましたが、同年の干支が乙亥であったことから、亥年に改められた新田ということ、「亥改新田」となったのです。

大和川が改流した結果、市域では寺ヶ池以外にも同じ三宅村や城連寺村(現天美北)の多くのため池が新田となりました。松原は平坦地で江戸時代でもすでに田畑が広がり、開発できる土地は少なく、池を埋めるのが最適だったのです。

今も、松原高校の敷地は「蔵重」とともに、「寺池置結」の小字名が残っています。すぐ北の高速道路側にも「寺池」や「未改新田」の小字名が見られることから、南北に広がる寺ヶ池跡が復元できるのです。